

僕が

背戸山葵

挿絵・黒筆ANNA

援交爆乳JKに

搾られて

貢ぎ奴隷に

堕ちるまで



試し読み版

プロローグ

第一章 J K見学店 マジックミラー越しのオナサポ

第二章 偶然の再会 援交JKのおっぱいサービス

第三章 初デート？ 焦らし洗体と被虐の目覚め

第四章 やめたい関係 年下ママの甘い誘惑

第五章 ファイナンシャル・ドミネーション 人生の搾取

エピローグ 貢ぎマゾに堕ちた僕

# CHARACTERS

登場人物紹介



りむ

風俗店で働いたり、援助交際で男にお金を貢がせて遊び放題している爆乳JK。

ごみひでゆき  
五味 秀幸

冴えない会社員。

## プロローグ

「ほら、し〜こ〜し〜こ〜♡ ふふふ、相変わらずお兄さんのおちんちん弱いですねえ、もう透明なお汁、出てきちゃってますよ？」

充血した硬い竿を緩やかに扱き上げ、鈴口から染み出した透明な液を指先で弄もてあそびながら、りむちゃんは耳元に囁ささやきかけてきた。声音は甘ったるく、口調も丁寧だけれど、その響きには嘲りが多分に含まれていた。

全て計算ずくの行為だ。

官能的な熱っぽい吐息を耳にかけてくるのも。

シャツに滑り込ませた手で硬くなった乳首を弄ぶのも。

規格外に大きなおっぱいをむにゅむにゅと背中に押し当ててくるのも。

全部が全部、僕に効く。弱点特効クリティカルだ。彼女はそれを見抜いて、見抜いているからこそ執拗に狙ってくるのである。

「まだ軽く扱き始めただけなのに感じすぎですよ♡ ふふふ……だったら、こうやって亀さんにくくにしてあげたらあ……」

りむちゃんはくすくす笑うと、柔らかな手で先端部を包み込み、緩やかに手首をしならせて亀頭表面をすりすりとの摩擦してくる。張り詰めた粘膜はあまりに敏感で、たったそれだけの刺激で腰が浮いてしまう。情けない声が出てしまう。

「ひあああ……やめっ、それ……」

「んん？ やめて欲しいんですか？ だったらやめちゃいますけど……」

手が止まる。けど、離さない。先っぽの硬さを確かめるみたいに、くにくにと揉んでくる。彼女の手の中で、もどかしそうにペニスが脈打つ。ズキン、ズキンと血流を感じられるほどはつきりと。

「い、いやだ……やめないで……ううう……」

「くふふつ、やめないだけでいいんですかあ？」

発育しすぎた乳肉をわざとらしく背中に押し付け、筐体ゲームのスティックみたい僕らの男の部分を弄びながら、そう訊ねてくる。その言外の意味を、くすくす笑いに含まれた挑発を僕は瞬時に理解した。

火照った顔がますます熱くなる。

「黙ってるってことは、このまま、じっくり、じわじわ……可愛がっちゃっても、いいってことですよね♡」

「あう……そ、そんな……」

恥ずかしい。自分よりずっと年下の彼女におねだりをさせられる時、いつも強烈な羞恥を覚えずにはいられない。

しかし、逡巡は束の間だった。躊躇いも恥ずかしさも、射精したい、という浅ましい欲求に、秒で塗り潰された。

一週間も我慢したのだ。フラストレーションは、この安ホテルに入った時点で高まりきっていて、ズボンを脱いだ途端に果てていないのが不思議なくらいで。これ以上焦らされたら、気が狂いそうだった。

喘ぎ声と荒い息の隙間を縫うように、情けない懇願が溢れ出していた。

「お、お願い……イかせて……射精させてえ……!!」

「ふふ、わかりました♡ それじゃあ、お望み通りにイかせてあげますね♡」

そう宣言するや、りむちゃんは僕にトドメを刺しに来た。

しっかりと竿を握りしめ、ひねりを加えながら、輪っかの形にした指をせり出したカリに引っ掛けるようにして、いやらしく抜き立ててくる。

「ほら、シコシコシコシコ♡ ふふ、私の手の中で、おちんちん凄い暴れちゃってますね、可愛い♡ シコシコシコシコ……」

耳元で繰り返される小気味よいリズムに同調し、手がしなやかに上下する。その性急ながらも艶めかしい手つきは、風俗嬢顔負けの、まさに、男を射精に追い詰めるためのテクニクだった。

「ああ……そ、それ……はあああん……うう……」

待ち望んでいた快感に少女の腕の中で身体がはねる。腰が浮き上がる。気持ちよすぎる。自分で抜く何倍も気持ちがいい。一週間我慢させられた精液がぐんぐん上ってきているのが実感できた。

「いい声ですね〜ほら、シコシコシコシコ〜♡ いいんですよ〜全部私に任せて……力抜いて〜射精のことだけ、びゅ〜♡ することだけ考えてくださいね〜♡」

シャツに潜り込んだ彼女の指が僕の勃起した乳首をキュツとひねる。

ピリピリと電気が走ったような、切ない刺激に思わず身をよじってしまう。そんな僕の動きを封じるように、りむちゃんは僕を抱き寄せてくる。

柔らかなおっぱいが背中にグイグイきて、耳に甘い声と吐息が絡み付いて……身体中から流れ込んできた気持ちいい感覚が、下半身に集中していく。

「ひあ、ううう……イク……イっちゃう……くうう……」

「あは、ほんとお兄さんってチョロくて助かります♡ それじゃあ気持ちよくイかせてあ

げますからね——」

りむちゃんのがのしかかるように身体を密着させてきた。おっぱいが背中中でむにゅむにゅと潰れる。瑞々しい唇が耳たぶを食む。

さらに、水気さえ感じるくらい近い距離で、

「ぴゅっ、ぴゅっ、ぴゅうううう~~~~♡」

「ひあ、あ、あああ……イク、イク……ひあううっ！」

耳元で囁かれた瞬間に、官能の怖気が身体の芯を走った。

彼女の手の中で快感が弾けた。断続的な脈動と共に熱い快楽の奔流ほんりゅうがぐんぐんせり上がってくる。僕は蕩とろけた声を上げ、腰を前後させ、りむちゃんの手に一週間溜めた濃厚な性欲を吐き出した。

「たくさんぴゅ〜できて偉いですねえ……ふふっ、そんなに私の手でシコシコされるの、気持ちよかったですか？」

りむちゃんは、白濁でドロドロになった手を僕に見せつけ、優越感たっぷりぷりに微笑した。「はあ……はあ……ふうう……うん、よかったです……」

僕の頭はまだぼーっとしていた。うっとりとするような心地よさが、股間を中心に広がっている。一週間溜めた分、放出の快感はひとしおで、いつまでもその余韻に浸っていた



いくらいだった。

りむちゃんはウエットティッシュで丹念に汚れを拭き取ると、素っ気なくゴミ箱に捨てた。ただ、処理しただけだと言わんばかりだ。

「それじゃあ、お兄さん。手コキは二万円になりますね」

安いラブホテルのベッドの上で、彼女は綺麗になった手を僕の前に差し出して言った。行為の手軽さや短さからすれば、かなり割高な対価と言えるだろう。風俗だったらもっと安い値段で、もっと長時間、色んなプレイを楽しめるところも少なくない。三千円で抜いてくれるお店さえあるのを僕は知っている。

それなのに、たった十分そこらで、しかも一回手で射精させただけで。

だが、僕は彼女に逆らわなかった。ダイニングテーブルに置いた財布から、ATMで下ろしたばかりの万札を二枚取り出し、彼女に手渡した。

「はい……りむちゃん……」

紙幣を挿んだ僕の手は震えていた。

今の自分の姿を考えると、情けなさすぎて泣きたい気持ちになった。けれど、下半身は不随意の反応を示してしまっていた。

「ふふ、いつもありがとうございます、お兄さん♡」

彼女の感謝の言葉には心が籠っていないかった。その微笑には、嬉しさと同時に、僕への嘲りが含まれていた。

おかしいってわかっているのに、僕はなんでこんな馬鹿なことをやめられないんだろう——絶頂の波が時間と共に引き、少し冷めた頭でぼんやりと考える僕の前で、りむちゃん はピン札を指で弾いて高級そうな長財布に入れた。

説明のつかない甘い震えで、首筋の毛が逆立った。



僕はビククリして身を起こした。向こうが僕の顔を見るのは今日が初めてだし、常連だったとは言ったけど、それだけでわかるはずなのに——驚く僕に彼女は悪戯っぽく白い歯を見せて微笑した。

「ふふふっ、なーんて♪ 勘で言ってみただけなんですけど」  
つまり、カマをかけられたというわけだ。

「だけど、やっぱりあの田中ってお客さんなんですネ」

どうして仮名までわかったのだろうか——いや、そりゃわかるか。週に何度も足を運んで、りむちゃんだけを指名し続けたやつなんて僕以外にはいないはずだ。

少し恥ずかしかったが、言い当てられたことは嫌ではなかった。むしろ、自分のことを認識して覚えてくれていたのを嬉しく思い、僕は小さく首肯しゅこんした。

「こんな誘導尋問にひっかかっちゃうなんて、お兄さんって結構単純なんですネ」

そう言って、りむちゃんは販売用の冷蔵庫からなにかを取り出した。

小さなボトル容器のローションだった。

それを片手に僕の隣に腰を下ろし、未だにテントを張っている部分をさわさわとさすってきた。気持ちよくなっただばかりなのに、パンツの中身は返事をするようにビクッと震えた。

「ふふっ、やっぱりまだして欲しいっておちんちんも言ってますね♡」

その反応をおかしそうに眺めながら、また僕の耳元に囁きかけてくる。しつとりとした吐息と色気を帯びた艶声に、首筋の毛がそそけ立つ。

「次、お兄さんがして欲しいこと、当ててあげましょうか？」

「えっ……？」

「わかってますよ♡ パ・イ・ズ・リ♡ ですよね♡」

りむちゃんが胸にローションの容器を挟んで、おっぱいを上下させた。たわわな肉が、いやらしく形を変えながら、プラスチックの容器を押し潰す。

まるでパイズリの予行演習だった。男の性欲を完全に見透かした挑発的なアピール。上手すぎる。僕の性的興奮は容易くコントロールされていた。

「ば、パイズリ……したい……」

「ああ、ちなみにパイズリ代は三万円ですけど、もちろんして欲しいですよね？」

それはもう取引でもなんでもなかった。

ほとんど命令だった。

僕の頭の中には、パイズリのこと以外なにもなかった。

慌ただしくベルトを外し、ズボンとパンツをまとめて下ろした。ボクサー型のパンツの

ゴムに引つかかって、精液でドロドロになった肉茎がはね、天井を向いて屹立した。

「ふふふ、それが返事の代わりってことですね♡」

りむちゃんはローシヨンのキャップを開け、中身を胸の谷間に搾り出した。

両乳を大きく動かして、粘液を馴染ませるようにくちゅくちゅと攪拌かくはんしながら、僕の間隙に身体を割り込ませる。おもむろに重量感たつぷりのおっぱいを持ち上げて、赤く充血した亀頭部に狙いを定め、ゆつくりと下ろしていった。

豊かな谷間の入口に先端部がむにゅ、と触れた。それだけで、全身に鳥肌が立った。乳肌の触感だけで、そこから先の凄さを確信してしまっていた。

「それじゃあ……おっぱいでおちんちん、いただきま〜す♡」

ローシヨンでヌルヌルになった乳肉が亀頭や竿をぬめらかに摩擦しながら、ぬぶぬぶとにペニスを飲み込んでいく。りむちゃんのおっぱいはあまりに大きすぎて、根元から先端まで、完全に隠れてしまう。きめの細かい乳肌が、竿も亀頭も余すところなく、ひっそりと覆い包んでくる。

「ふあ、あああ……」

「情けない声〜まだ挿れただけですよ？」

くすくすと微笑しながら、りむちゃんはおっぱいを抱きしめるみたいに両側からむぎゅ

……と押しした。量感たっぷりの爆乳が全方位からみっちりと密着する。

全く動かされていない。ただ圧迫されているだけなのに、ペニスが甘く溶けてしまいうだ。まるで、快樂そのものの中に突っ込んだみたいだった。

「ひあ、あ……これ、すごい……パイズリって、こんな……」

「おっぱいの中で、おちんちんビクビクしてるの伝わってきますよ♡ でも、パイズリってというのはただ挟むだけじゃないんですよ」

おっぱいの心地よさに喘ぐ僕を、妖艶な眼差しで眺め、りむちゃんはペロリと唇を舐めた。獲物を前にしたサキュバスじみた淫らかな仕草だった。

「だって、おっぱいでおちんちんもみくちゃんにするのがパイズリなんですから♡ ほら、ほらあ……♡」

嗜虐的な笑みを浮かべ、りむちゃんは両手に余るおっぱいをこねるように動かし始めた。男性器を完全に埋もれさせてしまうほど巨大な豊乳が卑猥にたわんで形を変えながら、柔らかな弾力で勃起をむにゅむにゅと揉み解し、粘液のぬめりを助けに、男の弱い部分をいやらしく舐め回す。

「はああ……これ、すごい……」

「こうやってずりずり……ってされるの最高でしょ？ おちんちん溶けちゃうくらい甘々の

マッサージしてあげますね……♡」

圧倒的な巨大さを存分に生かしたダイナミックな乳ズリで、竿も亀頭もまとめて抜き抜かれる。ぬるついたローションを塗り広げるみたいに、もっちりした乳肌が過敏な粘膜を擦り上げる。甘い快感が間断なく送り込まれてくる。

視覚のないやらしさと、粘膜への快いマッサージに、思わず鼻にかかった喘ぎ声が漏れてしまう。挟まれただけで危うかったのに、これはあまりにも気持ちいい……。

「お兄さんのおちんちん、おっぱいの谷間であっぷあっぷしちやってますね♡」

粘液と空気が混ざり合う卑猥な音を立てながら魅惑の柔肉が上下する。たばんたばんと波打ち、重々しく太ももにぶつかってくる。

ズリ下ろされる度に、張り詰めた亀頭がちらちらと覗く。まるで、乳肉の海に溺れ、必死に息継ぎをしているみたいだ。根元から抜き上げられたその鈴口から、我慢汁が搾り出されローションと混ざって摩擦を一層滑らかにする。

「ふふふ、お兄さんもだんだん蕩けた顔になってきてますよ♡ まだまだ、気持ちいいのはここからですから、さつきみたいに暴発しちゃうわないように、気を付けてくださいね♡」  
りむちゃんはニヤニヤと笑いながら、円を描くように動かしたり、激しくシェイクしたり、手を離してたぶたぶ揺らしたり、変化に富んだパイズリで僕を責め立ててくる。



むちむちした乳肉が竿を押し潰し、扱き上げる。キメ細やかな乳肌が亀頭表面を舐め回し、張り出したエラに引っかかってくる。

おっぱいの谷間でズリ上げられた男の部分が、溶けてしまいそんな快感を訴える。さつき出したばかりなのに、下半身にもどかしい熱量が充填されていく。

りむちゃんの爆乳に性器を弄ばれながら、僕はベッドシートを握りしめ、情けない喘ぎを上げて身悶え続けた。

「ひあああ……パイズリ、やつべえ……気持ち、いい……」

パイズリがこんなに気持ちいいなんて。

エッチなのは見た目だけだと思っていたし、実際に以前風俗でもらった時も最後は手でフィニッシュしたくらいだった。

その経験があったから、パイズリで絶頂なんて、同人誌やエロゲの中だけだと半ば諦めていたのに。乳肉がたわんで上下する度に、快感で腰が抜けそうになって、全部持っていかれそうになる。

「ふふふ……ほんと男の人って、おっぱいによわいですね……♡ おちんちん挟んで可愛がってあげるだけで、すぐにダメになっちゃうんですから♡」

いや、違う。優越感たっぷり僕を嬲り続ける彼女を見て直感した。

パイズリが気持ちいいんじゃない。りむちゃんのパイズリが気持ちいいのである。最高の爆乳と、それを操るテクがあるからこそ、ここまで感じさせられてしまうのだ。

そのことを悟った瞬間、僕は嬉しくて仕方なくなつた。

こんなに凄い女の子と出会えて、こんなに気持ちいいことをしてもらっているなんて、自分はなんて幸運なんだろう。

「ああああ……りむちゃん……ううう……好き……」

思わず呟いてしまう。

声に出したことで、余計にりむちゃんのことを好きになつてしまふ。心がぴりぴりする。

「ふふふ……お兄さんつたら♡ おちんちん気持ちよくされたら、すぐに好きになっちゃうんですね……可愛い♡」

小馬鹿にするような声さえちんちんに響いてくる。

今の自分の感じている好きが、性欲に根差したものであつて、正しく彼女を愛しているということではないってわかつていても、好きだつた。

仕方なかつた。好き、好き、と小さく呟きながら、パイズリ刺激に没頭すると快感がさらに高まつていった。

「ほらほら〜いっぱいはずりずりしてあげますから、私のこともっと好きになっちゃってく

ださい♡ ずり、ずり、ずり♡」

媚びるようなセリフが堪らない。どんな風な言葉を使うと僕が悦ぶのか、この子はわかってやっているのだ。ズルい。けれど、僕は彼女の意思通りに興奮させられてしまう。見学の時も感じていたことだが、りむちゃんの意のままにコントロールされているということ自体が性的快楽のエッセンスになっているらしかった。

爆乳でズられるにつれて、精液がぐんぐん上がってきているのがわかる。もどかしさに腰が勝手に浮き上がる。

「あああ……りむちゃん……も、もう……イ、イっちゃうよ」

「あら、もう出ちゃうんですか？ お兄さんのおちんちん、ほんとに弱いですね♡」

困ったような表情で僕を見上げ、嘲笑するように。その仕草が、言葉が、どうしようもなく効いてしまう。ああ。このまま、乳内なに射精したい――。

「ううう……弱いからあ……だから、射精させてえ……！」

「ふふ、いいですよ、このまま私のおっぱいで気持ちよく搾ってあげますね♡ ほーら」  
そう宣言するとりむちゃんはおっぱいを激しく上下させてきた。悶えさせるパイズリから、イカせるためのパイズリへとギアチェンジしたのである。

繰り返される性急で長大なストローク。爆乳が押し合って過敏な亀頭部をぬめらかに摩

擦し、根元から精液を引きずり出すみたいなの乳圧で扱き上げてくる。

快感がペニスの芯を貫き、ゾクゾクと背筋を駆け上る。じれったい痺れだった射精感が、はつきりとした突き上げるような感覚へと変わっていく。

「ほーら、いつて…おっぱいに負けてください♡ よわよわおちんちんさん♡」

よわよわおちんちん、という言葉が脳内でリフレインする。

パイズリで気持ちよくちんちん負かされる、負かされたい。

おっぱいに心まで溶かされる。好きになっちゃーうー。

「あああ…むちちゃん、好き…好き…うううううううううう〜っ♡」

絶叫と共に快感が極点に達する。腰が跳ね上がり、肉棒は豊かな乳肉のさらに奥深くに潜り込む。おっぱいにみっちり抱きしめられ、溜まっていた内圧が弾けた。乳の谷間に勢いよく精液が放たれる。肉棒がトロトロに蕩けてしまったかと錯覚するほどの甘美な放出感が下半身全体に広がっていく。

「あつは♡ 出てる出てる…おっぱいの奥に熱いのきてるのわかります…」

りむちゃんはそう言うて両手で乳房を押した。凶悪なまでの乳圧に、痙攣するペニスが強制的に搾り上げられる。

「ひあ、あああ…そ、それダメだよお…くひいっ…」



気持ちがいい。安心。安楽。なんとも表現しがたい愉悦が、幸せが胸の奥からじわじわと湧き上がってきて、心の中にある大人の部分が甘く蕩けてしまいそうだ。

溺れる。このまま射精したら、年下のママにどんどん心酔していつて、離れられないようになりそうだった。だが、そう考えると余計にダメなのである。

ママの手の中で弄ばれるペニスが芯から痺れて、その痺れがどんどんはつきりとしたものに、射精直前のもどかしい感覚へと変化していく。

「ふあっ……ま、ママ……もう、イキそ、うう……」

勝手に出したっていいはずなのに、僕は無意識に絶頂が近いことを伝えて、それを我慢しようとしていた。彼女の合図で射精すると、気持ちよくなれることを脳とちんちんに刷り込まれてしまったから。

「ええーもうイキそうなんでちゅかー？ 二回もだちたあとなのに、ボクちゃんどんどんおちんちん弱くなつてまちゅね♡」

先端部を手で包み込んだ状態で、レバーを操作するみたいに手首を捻転させてくる。

キメ細やかな肌が先走りを利用して、敏感な龟头粘膜をヌルヌルと撫で回す。刺激は強烈だけど射精には直結しない種類のもどかしすぎる快感に、腰が悶えて浮き上がる。鼻にかかった情けない声が溢れてしまう。

「あああ……そ、それらめ……ううう……弱くなっちゃったからあ……」

「んふふ……イきたいならあ、『ママ』白いおもちらせてくだちゃい♡』って、媚びた声でおねだりちてみまちょうか？」

今にも笑い出しそうな口調でそう言ったりむちゃんの表情は、ママらしいものではなかった。意地悪で、支配的で、サキュバスめいてエロティックだった。

嘲笑的に細められた、妖しい切れ長の瞳に見下ろされると、心が勝手に服従していた。逆らえない。そんなおねだり死ぬほど恥ずかしいのに、りむちゃんに命令されたら、その恥ずかしいのが気持ちよくて。

口がゆつくりと乳首を離す。舌が震える。さつき「ママ」と言わされた時以上の強烈な欲求がせり上がって――。

「はああ……ママ、白いおもち……させて……くだちゃい……ううう……」

僕は泣きそうな声で言った瞬間、頭がクラクラするほどの興奮を覚えた。口に出すということは、考える以上に心に作用するのである。

「あつははは、完全に頭沸いちゃってる……おもしろ♡ いいでちゅよ♡ ボクちゃんのマゾおせーし、ママの手の中でいっばいぴゅーちまちょうね♡」

りむちゃんは僕の口に乳首を押し付け、手の動きを変化させた。じつくりと快感を蓄積

させるものから、フィニッシュへ追い込むための激しいものへと。

柔らかな手が心得た力加減で竿を握って、捻りを加えつつ、カリ首や裏筋を指で刺激し、リズムカルに肉棒全体をシェイクしてくる。

「ほーら……おちんちんちゅこちゅこされるとお……マゾおせーし、少しずつあがつてきまちゅねえ……♡ 気持ちいい、ママのおでて、気持ちいいねえ……くすくす♡」

ママの手が上下する度に、先走りが空気に混ざってくちゅくちゅと淫らな音を立てる。思わず腰が浮き上がる種類の強烈な快感がペニス全体を甘く痺れさせる。

睾丸が引き締まり、脚がピンとなる。気持ちいい。もう堪らない。快楽と興奮でおかしくなりそうだ。

「んんっ……ママ……あああ……ママあ、んちゅう……」

「ボクちゃんは、何にもしなくても、ママが全部やってあげまちゅからね♡ ボクちゃんは、ママの手の中でおせーしびゅっびゅすることだけ考えまちゅようね♡」

ママの甘ったるい言葉が耳から入り込み、僕の思考を染め上げる。

出したい。早く。年下のママの手の中でびゅっびゅしたい——頭の中がそんな欲望でいっぱいになる。

僕はママへの好意を示そうと、おっぱいにむしゃぶりついた。唇をすぼめて、舌先でシ





「あーあ……すつかり赤ちゃんになっちゃって、しかたないでちゅね〜♡」

りむちゃんはベッドの上に転がっていたティッシュ箱から三枚手早く取った。僕の出した白濁液をそつと拭いゴミ箱に投げる。

「じゃあ、もうちよつと……ママでいてあげまちゅね〜♡」

ママの手が僕の胸を優しくトントンしてくる。心地いい。射精したあとなのに、虚脱感がない。いわゆる賢者タイムっていうのが来ていないのである。満たされた気分で、いつまでもママに、おっぱいに甘えていたい。

「んんっ……んんっ……」

彼女の手はわき腹の辺りに降りてきて、僕の少し緩んだお腹を軽く摘まんで、優しく撫でてくる。くすぐったさに思わず身をよじる。

さらに手は脚の方へ滑り下りてきた。指先を這わせるようにして、内腿をさわさわと撫で回す。巧妙なフェザータッチのそれは、明らかに愛撫だった。くすぐったい感覚が徐々にもどかしい快感へと変わっていく。勃ちっぱなしのソレがピクピクと震えてしまう。

「ボクちゃんのこれ、全然萎えまちなねえ……まだ出ちたいのかなあ？」

りむママはくすぐくすぐと笑い、肉棒を指で撫でてきた。根元から先端にかけて、つつつ……と下側をなぞり、亀頭を摘まんでくにくいと揉み込むような刺激を与えてくる。

「あうう……」

「ビクンビクンって震えちゃって可愛いでちゅね♡ よーちよち♡」

竿を撫で擦りながらの、子供をあやす時みたいな赤ちゃん言葉が異様に興奮を煽ってくる。中途半端な快感刺激に自然と腰がくねってしまふ。それを続けられるうちに、ムズムズするようなもどかしさが少しずつ募ってくる。

はつきりとした刺激が欲しい。もっと。

けれど、僕が口に出すより先に、りむちゃんの手は竿をそつと握り込んでマッサージするみたいにちゅこちゅこと上下に擦り始めていた。

「ふふふ……ボクちゃんは、何にも言わなくていいからね……♡」

甘く優しい声音と下半身から伝わってくる快感に、身体は素直に従ってしまふ。完全に僕は手のひらの上だった。

僕はここでは、おっぱいをしゃぶっているだけでいいんだ。

ママに全てを委ねる態勢になってただ、気持ちよさに浸る。

「んちゅっ……んんっ……」

死ぬまでここにいたい。一生ここで暮らしたい。そう思えるほど、年下ママの膝枕は心地よかった。男の感じる部分を完全に把握した巧妙な手は、緩やかに上下しているだけな

のに、ズルいくらい着実に性感を引きずり出してくる。

さつき射精したばかりだつていうのに鈴口から先走りが溢れ出してた。

「エッチなお汁、出てきちゃいまちたねえ……綺麗にしてあげまぢゅね〜♡」

呆れたように言いながら、彼女はカウパーを親指ですくって亀頭表面に塗り拡げていく。だがそうやって敏感な粘膜をぬめついた指の腹で擦るのは意味がないどころか、全くの逆効果だ。腰砕けの快感に、汁はどんどん溢れてきてしまう。

「うう〜ん……拭いても拭いても出てきちゃいまちゅねえ……いやらしいボクちゃん♡」

それをわかっていながら、彼女は意地悪をしてきているのである。その甘い言葉責めが効いてくる。

ママの手の中で翻弄ほんろうされる。快感が高まるにつれてストロークのピッチが少しずつ早くなっていく。性急なペースで竿を抜き立てられ、亀頭をヌルヌルと摩擦されるうちに、ペニスは切なく痺れたようになってきた。

「ふうう……んんっ……ママあ……も、もう……」

「射精、したいんでちゅか？」

僕はコクコクと頷いた。

「ダーメ♡」



気持ちいいのに、決して絶頂までは到達させない絶妙な加減で竿を抜き立てながら、再び赤ちゃん言葉で煽ってくる。

「このパンパンになったおちんちん扱かれてえ……熱い精液が、ドクドクって……上ってきて……ぴゅっぴゅっって……」

「ああ……や、やめてえ……」

甘く誘うような声音が耳から流れ込み、脳内に映像を描き出す。

射精の気持ちよさ、あの一瞬だけれど強烈な放出の悦びを想起し、彼女の手の中でペニスがかピクピクと反応してしまう。

「気持ちいいでちゅよねえ、射精……大ちゅきでちゅもんね♡」

嘲笑を浮かべ、緩やかな手コキを継続しながら、おっぱいをたふたふと揺らしてくる。

あまりに見え透いた誘惑だ。なのに、拒めない。それがりむちゃんのズルすぎる手口だとわかっていても、僕からお金を搾り取るためにしているってわかっていても、抵抗は不可能だった。目を開けていなければならぬ状況にあっても、強烈な光を投射されたら目を閉じてしまうのと同じことである。

「気持ちいいぴゅっぴゅしたいなら、どうすればいいか……おりこうさんのボクちゃんは、わかってまちゅよね♡」

「あ、あ、あ……」

甘ったるい声で思考はグズグズで、射精欲求に歯止めが利かなくて、僕の手はベッドの上の財布に伸びていた。万札を五枚抜き出すと、小銭や千円札が残っているのに一気に財布が軽くなったような気がした。

お金を差し出すと、りむちゃんは、それを強奪するように引き抜いた。いや、違う。僕の指に力が入っていたのだ。

「どうもありがと♡」

いつもと同じ、少しも心の籠ってない感謝の言葉。

上辺だけだっただけでわかるけれど、だからこそ、耳にした瞬間、全身に鳥肌が立ち、ペニスがビクビクと痙攣してしまう。

「それじゃあ、はい、おっぱい♡ 吸っていいでちゅよ♡」

おっぱいが顔に押し付けられる。ずっしりとした重さを感じながら、僕は唾液で濡れた勃起乳首にむしゃぶりついた。

頬をすぼめてその生硬な突起を吸うと、幸せな気分が口中に広がった。

「ママの手の中で気持ちよく出ちまちょうね♡」

手の動きがいやらしく、激しいものに変わる。射精に追い上げるための性急な速度で、

竿を抜き抜かれ、中途半端な状態だった射精感が、一気にはつきりとしてくる。

「ふふ、もうおちんちんビクビクでちゅね。精液、上がってきまちたね♡ ほらあ……  
五万四分のお射精、しつかり味わいまちようね♡」

快樂への欲求に負けて、射精のために大金を支払わされた。搾取された。こんなことするべきではないのに。その背徳感と敗北感が快感を倍増させていた。苦しいのに、脳が溶けそうなくらい気持ちがいい。

「んんっ……んんっ、むううう……♡」

心はもうぐちゃぐちゃだった。このまま、ダメになりながら、射精したい——。危うい欲求が高まると同時に、腰が、クンツ、とはねた。

「もう出るね、出ちゃうね♡ はい、ぴゅっぴゅっぴゅ♡」

「あああ……んんんっ……♡」

痺れるような絶頂感が脳を衝き、りむママの手の中でペニスが脈動する。掛け声に合わせるように、熱い欲望の液体がぱっくりと開いた尿道内を擦り上げ、ビュクビュクと放出される。

熱い液体は、僕の胸の辺りまで精液が飛んだ。四回目だというのに、その量も、勢いも、快感も、今日一番だった。





この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**

二次元ドリームノベルズ

姫騎士

とろ蜜美女めぐりの  
桃色バスツアー

日常に密着したエロス  
リアルな舞台設定で送る  
官能小説レーベル!

小説家になるこの男性向けサイト  
「ノックタリッシュノベルズ」  
から書籍化!

姫騎士 クラスメイト!

リアルドリーム文庫

ビギニングノベルズ

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

タイズ?

あなたはどの

あとみっく文庫

呪祖喰らい師

あの人気作品の  
外伝作品もあり!  
電子書籍でしか読めない電子小説

フリーダム120%!?  
ジャンルにとらわれない  
ドキドキキアラノベル!

二次元ぷち文庫

新世界の  
ドキドキ  
キアラノベル

ドキドキキアラノベルな  
ハイレム系  
ライトノベル!

二次元ドリーム文庫